

埼玉親善大使・フィンドレー大学奨学生レポート 4月  
発表の大切さ

9ヶ月間のアメリカ留学も終わりを迎え、日本に帰国しました。4月は最後の月らしく、沢山のイベントがあり、大変忙しいものとなりました。特に、私は学内のシンポジウムに力を注ぎました。また、NBOでのインターンシップでは、社長、工場長、上司の方々の前で、成果発表を行いました。この2つのイベントを踏まえ、自分の意見・考え方をアウトプットする機会の大切さを感じました。

■ Symposium for Scholarship and Creativity (学内シンポジウム)

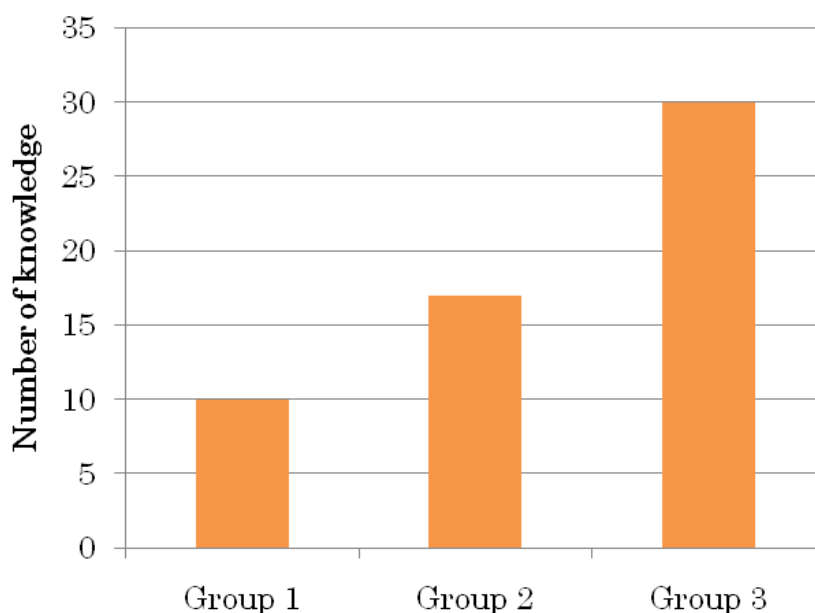
このシンポジウムは毎年行われるもので、フィンドレー大学の学生が自身の研究を発表する貴重な機会です。プレゼンテーション形式とポスター形式があり、毎年多数の学生が参加します。大学の授業によっては、ポスターを作成し、シンポジウムで発表することが必要とされるものがあります。また、プレゼンテーションを聞きに行き、プレゼンターからサインを頂くことで、授業評価に点数が加算されたりもします。

私は、プレゼンテーションの枠を頂き、以前より行なっている国際ディスカッションイベントについての発表をしました。このシンポジウムは、「何をしたのか」や「何を学んだのか」についての発表ではなく、「何を研究し、発見したのか」について発表する場であるため、アドバイザーである川村准教授の指導のもと、簡単な研究を行い、その成果を発表しました。しかし、それだけではなく、来てくださった方々に、私達がどんなディスカッションを毎週行なっているのかを体験して頂くために、「妊娠中絶」を題材に、パネルディスカッションを行いました。この国際ディスカッションイベントが、妊娠中絶を始め、宗教や人種差別などのタブーピックを議論できる場の一つとなっていることを強調するため、アメリカ人の中ではあまり上がることがない「妊娠中絶」という難しい題材を敢えて選択しました。

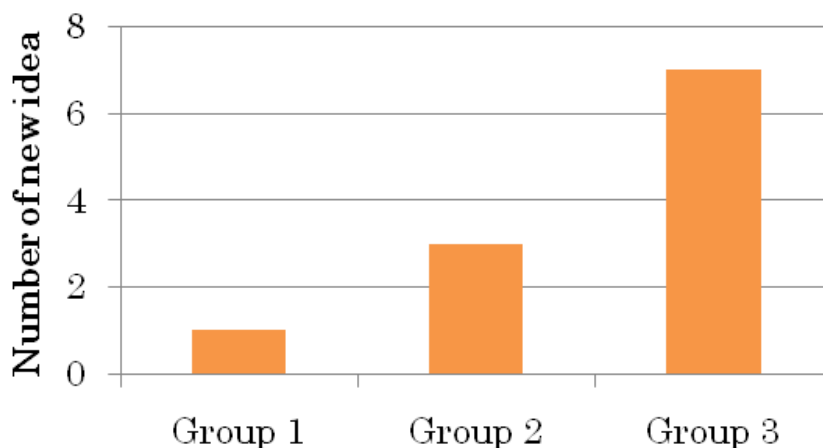
シンポジウムの3ヶ月前より、ディスカッションイベントの運営メンバーでミーティングをし、どのような研究や発表をするのか入念に準備してきました。研究では、「ディスカッションにおける多様性が創造性にどのような影響を与えるのか」をテーマにして進めました。実験方法としては、4人グループを3組つくり、ディスカッション内容を録音、分析するという簡単な方法です。グループの分け方は、二カ国の学生で構成されるグループをグループ1、三カ国の

学生で構成されるグループをグループ2、四カ国の学生で構成されるグループをグループ3としました。ディスカッションのトピックは、「最新小型飛行ロボットの有効活用方法について」で、知識と新しいアイデアの二点について議論内容を分析しました。ここで述べている知識とは、既存のもので、例えば、「日本では、ラーメンを作るロボットがあるよ。」や「韓国の消防士は、ロボットを使って、人命救助を行っているよ。」などの知識です。新しいアイデアとは、「小型飛行ロボットを用いて、犯罪の追跡用に使えば良いんじゃない。」などの自身独自の考え方です。この二点について、録音内容を分析したところ、以下の図のような結果になりました。

### *Knowledge and Information*



### *New Idea*



上図から、多様性は創造性を豊かにすることが見て取れると思います。このように、私達の国際ディスカッションイベントは、この点において優位性を保っており、大学にとっても良い影響を与えるのではないかと考えます。

次に、パネルディスカッションについてですが、ベトナム人、韓国人、日本人の三人のパネリストを迎えて、行いました。それぞれの中絶に対する考え方の違いをもとに、意見を言い合い、観客を巻き込みディスカッションをしました。また、各国の中絶状況、例えば、どの年齢層の中絶率が一番多いのか、中絶する主な理由、中絶を抑止する政策など、を事前に調べ、国際的なディスカッションを意識しました。しかし、突っ込みにくいトピックであったため、序盤はあまり盛り上がりませんでした。これは、多様性に富み、沢山の異なる文化を持つ人が集まるアメリカだからこそ、タブートピックに対して敏感なのでは無いでしょうか。最後には、気まずさが和らいだのか、観客からの質問も飛び交い、盛り上がりました。



ディスカッションイベントの運営メンバー

## ■ インターンシップでの最終報告

ニッシンブレキオハイオでのインターンシップの集大成として、成果発表を行いました。これまで取り組んできた事を再度見直すということは、何事においても大切であり、やりっ放しを防ぐためにも発表の機会は無くてはならないものだと思います。発表資料を準備している際、これまでの仕事を振り返り、感慨深い気持ちになりました。また、会社の皆さんに私達がこの9ヶ月間何をしてきたのか、何を得たのか、を伝えたことで、このインターンシップの意義が見えたのでは無いでしょうか。社会人になれば、何事にも結果が要求されます。学生にとっても、発表の機会があることで、「ただ何かやった」だけではなく、「何を生み出したのか」を考える良い状況が生まれるのだと思います。

この9ヶ月間で、20回を超える発表を行ったのではないかと思います。これは、やはり独立性が高いアメリカだからこそだと感じます。また、埼玉県代表としての留学であったため、地域のコミュニティへの発表や大学への発表など沢山の発表機会を頂きました。同時に、私が一番成長した能力も、この発表能力だと思います。ただ知識をインプットして学習していくのではなく、そこから自分の考えを形成し、アウトプットしていくことが自身のオリジナリティを生み出すことに重要になると信じています。